新入生に贈る言葉

2020年4月に開催予定の入学式は、新型コロナウイルス感染拡大の影響を受けて中止となりました。そんな中入学し慶應医学部生としての道を歩み始めた105回生たち110名に向けて、最大のエールを送ります。

新入生歓迎の言葉 コミュニケーション能力を育もう

三四会長　武田　純三（52回）

慶應義塾大学医学部入学おめでとう。これから医学の道に進んでいくことになります。6年間医学部で学んだあと、2年間の初期研修医として臨床研修を行い、多くの人は約4年間の専門分野の研修を受けることになります。これから12年間、医学教育を受けることになります。

近年の医学の進歩により、これまで分からなかった疾患に診断が付けられるようになり、治療法がなかった疾患に治療法が開発されようとしています。一方で、私達が学生の頃との大きな違いは、学ぶべきことがネズミ算的に増えたことです。さらに増えそうな様相を見せています。

これらの新しい診断法や治療法は、特定の診療科、職種だけで完結できるものはないと言って過言ではなくなってきています。多診療科、多職種の協働によって、新しい時代の、先端医療が成り立っているのです。したがって、看護医療学部や薬学部などの他学部との連携や診療科間の連携を、学生の時から身に着けておく必要があるのです。

現在外来や入院に使用している新病院棟は、医学部百年を記念して建てられた病院で、2018年5月に開院しました。「医看薬の連携による世界を先導する医療人の育成」が病院建設のコンセプトの一つになっています。院内には看護医療学部、薬学部との合同での授業を念頭にしたスペースを確保しており、一緒に学べるように設計が施されています。協働は、互いの職種のことを理解することから始まります。

北島多一先生は、1920年（大正9年）11月に開院を迎えた慶應病院の設計に当たって、診療各科の連絡をよくすること、共同研究室を作って互いに助け合う様にし、基礎科の教授、助教授にも来て指導して貰う様にすることを、求めていました。慶應の医学部が開設した当時から、患者さんを多診療科、基礎と臨床の皆が協力し合って診療しようとしてきたのです。

決まった仲間で行うチーム医療に加えて、これからの医療では、特定の構成員ではない異なった職種のメンバーと連携を取り、診療を行うことが必要で、それにはコミュニケーション能力が備わっている必要があります。これから始まる医学教育の中で、医学と共に人間性、コミュニケーション能力を育んでほしいと思います。

医学・医療の発達は、患者と医療者の両方に恩恵を与えてくれますが、一方で研修期間が延びることになりました。この期間に、医学と人間性の両方を学んでください。それが慶應医学を支えてきた、福澤・北里の訓えです。

君たちの前に輝ける未来はある

常任理事　竹内　勤（59回）

新入生の皆様、医学部ご入学おめでとうございます。

2019年末、中国武漢で報告された新型コロナウイルス感染症COVID-19はパンデミック感染症として世界を震撼させています。日本もその例外でなく、緊急事態宣言の下、人々の生活は大きく制限され、全てが大きく様変わりしています。例年であれば新入生諸君を盛大に迎えるはずの入学式も延期となり、授業も対面式からオンラインへと形態を大きく変えることになりそうです。

今後の予想は専門家ですら見通せない状況の中にあって、皆さんも大きな不安を抱いている事と思います。このような困難な時期だからこそ、私たちは自らの頭で考え、学び、そして責任を持って行動することが求められています。この困難の先には、必ず明るい未来があります。その未来を築いていくのは君たち新入生です。

創設者である福澤先生の建学の精神に、習慣や常識にとらわれることなく、自ら考え、自らの責任のもとで行動する『独立自尊』があります。実証的に真理を追求し、それによって課題を克服していく『実学の精神』があります。江戸時代末期から明治維新へとすべての概念が大きく変わった激動期に、福澤先生は蘭学医であった緒方洪庵のもと適塾で寝食を忘れて大いに学ばれました。その時の医学に対する深い思いを七言絶句『贈医』に託されと言います。曰く、医学は、天と人との無限の知恵比べである。医師よ、自然の回復力を信じる立場であるなどと、決して言わないでほしい。千里先まで見通すと言われた離婁の眼力、麻姑のように行きとどいた手によって、手段の限りを尽くしてこそ、医学の真髄である。今、私たちがCOVID-19と戦う様を見て叱咤激励してくれているかの様です。今から150年も前に、感染症と戦い血清療法の基礎を確立された北里先生も、今こそ基礎臨床一体型の慶應医学の真髄を発揮すべき時であると言われている様な気がしてなりません。

研ぎ澄まされた感性と飽くなき好奇心を持った新入生の皆さんには、教職員とともに、この言葉を胸に刻んで世界の先導者を目指して精進して下さい。心・知徳・体を鍛え、人徳と気品を養って下さい。足元をしっかりみつめ、真面目に、そして謙虚に取り組んで下さい。回り道などありません。皆さんの大いなる飛翔を祈念しております。君たちの前に輝ける未来は必ずあります。

今、医学・医療の原点に立ち返る

病院長　北川　雄光（65回）

医学部105回生の諸君、入学おめでとう。激動の中で医学・医療への道を歩みだす君たちにあらためて問いたい。本当に医学・医療の道に身を投ずる覚悟はできているだろうか。

今、新型コロナウイルス感染症の蔓延が、世界の社会構造そのものを震撼させている。我々が連綿と築き上げてきた高度な先進的医療を提供することすら儘ならない状況となっている。医学の歴史は、感染症との闘いの歴史でもあった。しかし、これは「歴史」ではなく、これからも続く永遠の闘いである。新興感染症の脅威の前には、先進国の高度な医学・医療も一瞬にして崩れ去るがこと明らかとなった。

慶應義塾大学病院は開設100年にして、史上最大の危機に直面し、今明日への活路を見出そうとしている。今ほど初代医学部長・病院長である北里柴三郎博士の「基礎・臨床一体の慶應医学」という言葉の重みを噛み締めたことはない。臨床に携わる医療者は、危険と背中合わせの最前線で闘い、基礎医学者は新たな診断、治療法の開発のために叡智を結集し、社会医学者がこれからの医学・医療のあり方を懸命に模索している。人と人との触れ合いを基軸としてきた医療が、今その変貌を迫られている。「命」のために自らを律して全てを捧げる医学・医療の原点、倫理感が今あらためて問われ、求められている。

君たちは、大きな歴史の転換点の目撃者である。我々がどのようにもがき苦しみ、どのように未来を手繰り寄せ、活路を求めていくか、その姿を目に焼き付けて欲しい。おそらく我々の世代は、多くの宿題を君たちの世代に託すことだろう。慶應医学の未来を担う諸君は、時代の転換点で「社会の先導者」となることが求められている。過去の成功例が全く参考にならない新時代が訪れようとしている。しかし、君たちのしなやかな「若さ」と君たちが生きる時代に与えられた多くの新技術を武器にこの困難を克服して欲しい。

君たちは、無限の可能性を秘めた宝の原石である。自分の領域を限定したり、情報収集の垣根を作ったりせずに多くの学びや体験の中から「考える力」「新しい概念を生み出す力」「予測不能の未来を生き抜く力」を養ってもらいたい。「医学・医療の道に身を投ずる覚悟」があれば、きっと未来を切り拓くことできるはずだ。君たちの成功と幸運を心から祈っている。

慶應医学へようこそ

北里賞受賞者
精神・神経科学教室准教授　田中　謙二（76回）

君たちはどんな医師を目指すのだろうか。研究者を目指すのだろうか。それとも医学とはあまり関連のない分野へ打って出るのだろうか。いずれにせよ言えることは、君たちの先輩方は、あらゆる分野で活躍している開拓者ばかりだ。大学にいると大学に残った先輩しか目にしないが、一度大学を出てみるといかに多くの先輩達が様々な分野で活躍しているか知ることになる。

慶應医学には100年一定期間、何かにトコトン取り組んで欲しい。部活、研究、ボランティア、何でも良い。一日は24時間しか無いので、何かに没頭すると他のことができなくなる。でもそれで良い。没頭することで君にしかできない何かが見えてくる。それが君の価値になる。中途半端にやらないで欲しい。勉強が忙しいからという理由をつけて中途半端に部活をしないでほしい。部活が忙しいからという理由で中途半端に研究しないでほしい。トコトンやってはじめて君だけの道が見えてくる。

慶應医学を作り上げてきた先達は、皆、トコトンやる人たちだ。一癖も二癖もある。でも皆、筋が通っていて気持ちよい。まずはそういう先達を自分で探そう。機会があればそういう先達に弟子入りしてみよう。トコトンやって挫折するも良し、こんなもんかと続けるも良し。どちらも塞翁が馬である。慶應医学へようこそ。

医師としての「業」を越えて

北島賞受賞者
内科学（循環器）教室専任講師　香坂　俊（76回）

新入生のみなさん、入学おめでとうございます。近い将来皆さんと医学部の授業や実習等で会えるのを楽しみにしています。私は循環器内科医として20年くらい働いていますが（半分は米国で過ごし、うち一年は上段の記事の田中先生と一緒でした）、それでも日々悩むことは多く、患者さんに教えてもらいながら少しずつ前に進む毎日です。そんな中、皆さんに一つお伝えできることがあるとすれば、それは健全に「死を意識する」ということではないかと思います。

医療関係者は他の分野でも優れた才能を発揮するということがよくあるようですが、このことは「死を忘れる」ということが職業的に不可能であるというところに由来しているのではないかと私は思います。死は平等で、「この世で死（と税金）以上にこの世に確かなことはない」と言われていますし、ヒトの寿命の生物学的限界は120―150年あたりということです。担当した患者さんが実は進行癌であと数カ月の命ということもあるでしょうし、手術や手技に回った患者さんが助からなかったということも経験すると思います。同年代の患者さんが心肺停止で救急外来に到着するということあるかもしれません。「死」というのは、医療関係者として生活を送っていると、いつのまにかひっそりと背後に立っているような存在です。

「好きなことを仕事に」という言葉がありますが、皆さんはその第一歩目を踏み出したところです。ただ、医療を生業としていると、究極的には不可避な「死」に対して全力で立ち向かうこととなり、かなり大きな矛盾を抱え込むこととなります。そのことをネガティブに捉えるのではなく、多くの先人たちのようにポジティブに捉え、限りある人生を意識し、ぜひ生産性の高い仕事をしていってください。この道を選ばれた皆さんの前途が明るいものであるように祈願しています。

初代医学部長・北里柴三郎の精神を継ぐ

医学部長　天谷　雅行（64回）

慶應義塾大学医学部105回生の諸君、ご入学おめでとうございます。

2020年は、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）のパンデミックが起こり、世界中でその影響を受け、人類史上に長く語り継がれる年となりました。105回生の諸君にとっては、本来であれば、完成したばかりの日吉記念館において、晴れやかな入学式が行われ、同級生と初めて会い、新しい仲間を作り、皆さん一人、一人の笑顔が、日吉キャンパスにあふれる特別な年になっていたはずでした。緊急事態宣言が出された中、大学生としての新生活を始めなければならない状況にあること、諸君の気持ちを考えると胸が痛みます。

しかし、君たちが伝統ある慶應義塾大学医学部の一員となった事実は、何ら変わるものでありません。開設103年目を迎えた慶應義塾大学医学部には、初代医学部長、北里柴三郎の開設の理念が今でも脈々と生きています。北里柴三郎は、「日本細菌学の父」として知られ、ペスト菌を発見し、また破傷風の治療法を開発するなど感染症医学の発展に大きく貢献しました。当時、ペストは、原因菌も治療法も確立しておらず、流行の最盛期は、致死率9割を越え、発病はそのまま死を意味していました。COVID-19の致死率は、地域、年齢により異なりますが、数%と比較すると、いかに怖い感染症であったか想像がつきます。

1894年、ペストはアジアで大流行をしており、当時日本政府は、日本に伝わってきたら一大事であると認識し、調査隊を結成し、北里柴三郎に担当を命じました。そして、流行地、香港にその実態を解明するために、国を代表して向かいました。出発する前に、妻の雋（とら）に「ペストの調査に危険はないのですか？」と聞かれるも、「防御に最新の注意を払っていれば恐れる必要は無い。」「男には命ばり賭して事にあたらんばならん時があっとよ。」と答えています。

香港では、ケネディ・タウン・ホスピタルで収容されている患者の診察、そして、原因菌の同定のための研究に当たりますが、ケネディ・タウン・ホスピタルは、患者を治療するためと言うより、一般社会から隔離するのが目的でした。患者が死亡すると、解剖しました。しかも、8畳ほどの部屋に、北里を含めて5人が入り、香港での日本の梅雨以上に蒸し暑い陽気で、市民に見られることを恐れ、窓も、カーテンも閉じており、蒸し風呂のような環境での解剖でした。まさに、最も感染の起こしやすい3密の条件が整っている状況でした。

そのような悪環境の中で、北里は、患者を解剖し、臓器を取りだし、それぞれの臓器を固定することもなく、細菌がいるかを顕微鏡で調べるというとてつもなき作業をしていました。そして、案の定、調査隊から複数名の感染者がで、死亡する医師もでました。福澤諭吉は、「北里を殺してはならぬ。学問のために大切な男だ。」として、「スグカエレ」と電報を打ち、帰国を促した程でした。しかし、北里は、今の時代では考えられないほどの悪環境の中で研究を継続し、ペスト菌を世界に先駆けて発見することになります。

北里がペスト菌と格闘した1894年から130年近くたった2020年、我々は新型コロナウイルスに対峙し、同じような戦いをしています。北里柴三郎の精神を受け継いでいる慶應義塾大学医学部において、次の100年に向けて、その伝統の上に新しい慶應医学の創出する基盤を構築し、次世代の担い手を育てることが、私たち医学部の大きなミッションです。そして、次世代を託せる諸君が新しい仲間に加わってくれたことを大変うれしく思っています。是非、一緒に新しい伝統を創っていきましょう。

歴史の転換点と人類への新しい脅威を乗り越えて引き継がれる伝統と新しい挑戦

医学研究科委員長　岡野　栄之（62回）

慶應義塾大学医学部105回生および大学院医学研究科の新入生の皆様、ご入学おめでとうございます。皆様が令和となっての初めての新入学生となられます。平成から令和へ、そしてCOVID-19のパンデミックという人類にとっての新しい脅威の出現など、まさに様々な意味での新しい時代に、本学に入学され、未来を切り開いていく皆様には多くを期待したいと思います。

COVID-19のパンデミックの最中に入学され、入学早々に緊急事態宣言が発せられ、入学式も未だなく、新入学の同期生とも会えずに不安になる方もいるかも知れません。しかしその一方、皆様は入学早々に医学が、そして人類が、この未知なウイルスと戦うかを目の当たりにされ、医学の道に進んだ自覚を深めるには、またとない機会になるでしょう。COVID-19の様な新しい感染症は、また将来、別の形で現れてくる可能性がありますが、診断・治療・予防法をしっかり構築することが重要です。医学がどの様に脅威となる感染症と戦うかを是非リアルタイムにWatchし、皆様の優秀な頭脳に焼き付けて下さい。

病気は、無論COVID-19感染症だけではありません。慶應医学は、大正6年（1917年）の開闢以来、様々な難病や不治の病いと戦って来ました。現在では、脳機能画像を含む各種画像技術、再生医療、幹細胞生物学とオルガノイド技術、iPS細胞、先制医療、抗体医薬などの生物製剤、ゲノム編集、次世代シーケンサーを駆使した稀少疾患のガンの個別化医療、マルチオミクス解析、Big DataサイエンスAI、人工知能の医学応用などの領域で、本学は世界をリードする研究を展開しております。そして、現在医学や医療には、革新的な技術がどんどん登場し、脊髄筋萎縮症などかつては不治の病であった疾患が治る時代を迎え、サイエンスとしても最高にエキサイティングな時代となって来ております。

明治29年に福澤諭吉先生は、北里博士へ、贈医（医に贈る）という七言絶句を贈っています。ここで、福澤先生は、「医学というものは自然と人間（天また人）との限りない知恵くらべ（輸贏）の記録のようなものである。医師よ、自分たちは（患者自身の）自然（の回復）を助けるにしか過ぎないなどと言ってくれるな。」と述べておられ、この「贈医」にこめられた福澤先生のメッセージは、今まさにCOVID-19感染症や様々な不治の病と闘っている慶應義塾塾の医師と医学研究者にとって貴重な心のバイブルとなっています。慶應義塾大学医学部および大学院医学研究科では、世界トップレベルの人材を集めており、福澤・北里両先生の高い理念に基づく世界最高水準の医学部・大学院教育を提供しています。学部では、基礎・臨床についての知識を深めるだけではなく、研究マインドを持った医師になることを目指し、大学院では倫理感を持って、自ら課題を探索し、自ら仮説を立て、それを実証するために最大限の努力をし、得られた結果により適切な結論を導き、それを誰にでもわかるような言葉で論文として公表し、そして次の課題を見出ししていくという研究者としての基本姿勢を身に付けていただきます。その上で、世界に発信する成果をあげ、そして世界の医学をリードして頂きたいと思います。それが皆様の大きなミッションです！

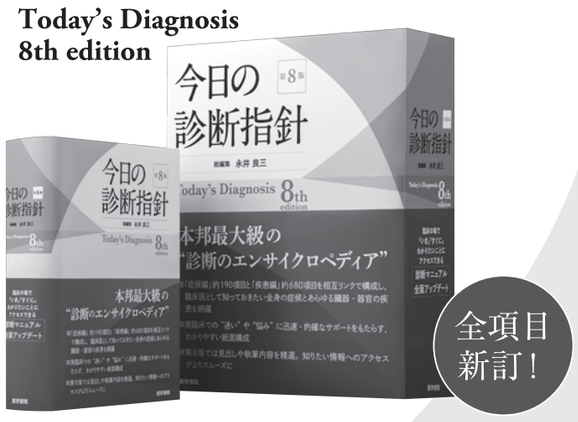
その為には、先ずは一歩一歩基礎を固めることが大事です。慶應医学の将来、そして世界の医療の未来を切り開くには、皆様一人一人の成長と弛まぬ努力にかかっています。入学おめでとう！始まったばかりの令和の時代に、世界をリードする慶應医学のさらなる発展を目指して、ともに学び、ともに成長して頂きたいと思います。期待しております。

本邦最大級の情報量を誇る“診断のエンサイクロペディア”

今日の診断指針

第8版

Today's Diagnosis
8th edition



全項目新訂！

総編集　永井良三　自治医科大学・学長

●症候編約190項目と疾患編約680項目を相互リンクで構成し、臨床医として知っておきたい全身の症候とあらゆる臓器・器官の疾患を網羅
●エビデンスに基づいた最新知識＋各領域におけるエキスパートの経験則を1冊に凝縮
●第8版では見出しや執筆内容を精選。知りたい情報へのアクセスがよりスムーズに

◉デスク判（B5）　頁2112　2020年
定価：本体25,000円＋税
[ISBN978-4-260-03808-9]

◉ポケット判（B6）　頁2112　2020年
定価：本体19,000円＋税
[ISBN978-4-260-03809-6]

Contents

I　症候編
1 全身的にみられる症候
2 脳神経・精神系の症候
3 頭部・顔面の症候
4 頸部・肩・胸部の症候
5 四肢・関節系の症候
6 胸部・心臓系の症候
7 胸部・呼吸器系の症候
8 腹部・消化器系の症候
9 腎・泌尿器系の症候
10 産科・婦人科の症候

II　疾患編
1 救急疾患
2 神経・筋疾患
3 消化器疾患
4 循環器疾患
5 呼吸器疾患
6 腎疾患
7 血液・造血器疾患
8 内分泌疾患
9 代謝性疾患
10 アレルギー疾患
11 膠原病・免疫疾患
12 感染性疾患
13 寄生動物疾患
14 中毒性疾患
15 精神疾患
16 運動器疾患
17 皮膚疾患
18 眼疾患
19 耳鼻咽喉疾患
20 泌尿器・男性性器疾患
21 妊産婦・女性性器疾患
22 新生児疾患
23 小児疾患
24 外来の小外科的疾患

医学書院　〒113-8719 東京都文京区本郷1-28-23　[WEBサイト] http://www.igaku-shoin.co.jp
[販売・PR部] TEL:03-3817-5650　FAX:03-3815-7804　E-mail:sd@igaku-shoin.co.jp

三四会百年記念式典のお知らせ

三四会発足百年を迎えるにあたり、本年6月13日に予定しておりました三四会発足百年記念式典および講演会・祝賀懇親会を、緊急事態宣言の発令及び慶應義塾大学医学部・病院の状況を鑑み、残念ながら中止とさせていただきます。

三四会長　武田純三

第89回北里記念式の中止について

例年6月12日に開催しております北里記念式ですが、新型コロナウィルス感染症の影響拡大を受けて、今年は中止とさせていただきます。なお、三四会賞（北里賞・北島賞）の受賞者については、三四会のウェブサイトにおいてお知らせいたします。

第121回生涯教育研修セミナー中止のお知らせ

毎年6月に開催しております生涯教育研修セミナーですが、新型コロナウイルス感染症の影響が拡大している状況を受けて、中止とさせていただきますことをお知らせいたします。